

全日本実業団が10倍面白くなるコラム③

リオ五輪代表たちの帰国後第1戦 その1

男子短距離、400 mH、10000mW、そして棒高跳で“夢の対決”が実現

文：寺田辰朗

全日本実業団への関心が陸上ファンのみならず、社会的にも高まっている。日本中を熱狂させた男子4×100 mRの銀メダル・メンバーや、競歩界初メダルの50kmWの荒井広宙（自衛隊体育学校）ら、リオ五輪代表25人がエントリーしたからだ。代表たちのパフォーマンスを見るだけでも一見の価値はある。さらに男子の100m、200m、400mH、10000mW、棒高跳では代表同士の対決も実現する。

●200 mに3種目の代表6人が集結

リオ五輪代表が最も多くエントリーしたのが、大会2日目の男子200mである。100m代表の山縣亮太（SEIKO）とケンブリッジ飛鳥（ドーム）。200m代表は藤光謙司（ゼンリン）、高瀬慧（富士通）、飯塚翔太（ミズノ）の3人が全員エントリー。そして4×400mR代表の田村朋也（住友電工）を加えた3種目の代表6人が集う（4×100 mRもカウントすると4種目）。

シーズンベストでは20秒11（日本歴代2位）を日本選手権優勝時にマークした飯塚がトップだが、言うまでもなく、簡単に勝てるメンバーではない。

山縣がリオで見せたスタートを切れば、4×100 mRの1走と200mの前半は同じ走りにならないとはいえ、前半でリードを奪うだろう。ケンブリッジは今でこそ100mの印象が強くなっているが、U20世界選手権もシニア初代表の13年東アジア大会も、種目は200mだった。東アジア大会では金メダル。その年好調だった飯塚に勝っているのだ。



リレーメンバー3人の対決だけでもワクワクするが、そこに藤光と高瀬が加わる。自己記録は藤光が20秒13の日本歴代3位、高瀬が20秒14の日本歴代4位で、飯塚との差は僅か（2人とも昨年出した記録）。リオで不完全燃焼に終わった思いを、五輪後初対決にぶつけてくるだろう。

今年6月の日本選手権では、山縣とケンブリッジは200mに出ていないので、メンバー的には日本選手権以上の戦いとなる。前半をリードするのは山縣と思われるが、高瀬の前半のスピードも引けをとらない。リードする2人を飯塚、ケンブリッジ、藤光が直線で追い上げる“豪華なシーン”が、長居競技場で展開される。混戦となれば、前回優勝者の田村にも活路が生じる。

この夢のような戦いを、見逃す手はない。

●400 mHはミズノ勢対決＋ブラジル代表

男子400 mHには野澤啓佑（ミズノ）と松下祐樹（ミズノ）、日本代表2人がエントリーした。昨年の北京世界陸上では松下が、リオ五輪では野澤が準決勝に進出と、世界に迫っている種目である。



同学年の2人は仲の良いチームメイトだが、ライバルとして互いに刺激し合ってきた間柄でもある。昨年は松下が、混成競技から本格転向して僅か3シーズン目で、世界陸上のセミファイナリストに成長した。それを見た野澤が、昨年の今大会で3年ぶりに自己新をマークし、リオ五輪の標準記録を突破。今季の躍進につながった。

今季は野澤が、日本選手間で無敗を続けているが、松下としてはなんととしてもストップをかけたい。それが、世界へ再挑戦するためのスタートになる。

レース展開は、野澤が前半をリードするだろう。今季に入ってインターバルの歩数を、昨年までの14歩から13歩に変更し(4台目まで)、

前半のスピードが大きく上がった。だが、後半の強さは松下が上で、日本選手権でも終盤で追い込んでいた。

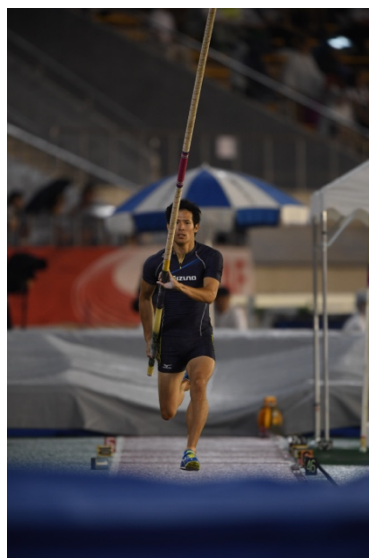
面白いのは、そこにブラジル代表の杉町マハウ(日本ウェルネス)が加わる。リオ五輪では野澤と同様に準決勝に進出。5月の東日本実業団では48秒96で、自己新を出した野澤に0.27秒差と迫った。後半もインターバル13歩で走ることができ、世界的にも希有なハードラーだ。ミズノ勢の対決に割って入るどころか、優勝をさらう可能性も十分持っている。

●棒高跳は実業団過去最高レベル

男子棒高跳にはリオ五輪7位の澤野大地(富士通)をはじめ、荻田大樹(ミズノ)、山本聖途(トヨタ自動車)と五輪代表3人が出場する。澤野は7月に5m75と今季世界リスト8位(9月7日時点)を跳んだ。山本は室内ではあるが、今年1月に5m77の室内日本新に成功している。荻田も4月の米国遠征で3年ぶりに5m70を超えた。5m70台のシーズンベストを持つ3選手が全日本実業団に揃うのは、史上初めてである。

注目されるのはやはり、日本記録保持者の澤野だろう。リオ五輪の入賞で、存在感がさらに大きくなった。五輪は04年アテネ大会が13位、08年北京大会は予選落ち、そして8年ぶり3回目の出場となったリオ大会で、この種目64年ぶりの入賞を果たした。9月で36歳となったが、年齢に応じたケアの仕方、日常生活の過ごし方、そして試合に向けてのメンタルの持って行き方など、ベテランの取り組みに若手の参考となる部分が多い。

リオで力を出し切れずに予選落ちした荻田と山本が、五輪後第1戦でどんな戦いを挑むのか。今季は国内の試合でも、澤野が全勝している。同記録の接戦となることがあっても、失敗試技数の違いで澤野が勝ち続けてきた。澤野の連勝を止めることで、荻田と山本は再スタートを切りたいところだろう。



●競歩はオールスターゲーム

実業団大会の男子競歩は例年、“オールスターゲーム”と言われている。

種目は五輪&世界陸上が 20kmWと 50kmW なのに対し、実業団の試合は 10000mW。距離も実施場所（トラックとロード）も異なるが、どちらの種目の代表も積極的に出場する。今年はリオ五輪 50kmW銅メダルの荒井をはじめ、50kmW代表の谷井孝行（自衛隊体育学校）と森岡紘一郎（富士通）、20kmW代表の藤澤勇（ALSOK）と高橋英輝（富士通）の 5 人がエントリーした。

注目は日本競歩種目初のメダリストとなった荒井だが、10000mの距離では 20kmW代表コンビに分がある。特に高橋はこの種目の日本記録（38 分 01 秒 49）保持者で、短い距離のスピードは競歩仲間からも一目置かれている。状態が良ければ、自身の日本記録にトライするのではないかな。

荒井はスピード型ではないが、長い距離を歩き込むことで歩型を矯正し、スピードも向上させてきた選手。今年 2 月の日本選手権 20kmWでは 1 時間 19 分 54 秒と、50kmW選手の日本最高タイムで歩いた。長い距離に取り組みながら培ったスピードが、リオ五輪の勝負所で発揮されたと見て間違いない。

全日本実業団は五輪直後に短い距離で刺激を入れ、この冬の 20kmWや、50kmWの日本記録更新に結びつけようとしているのだろう。他の代表たちも、同じような狙いで今大会に出場する。

レース展開は序盤、あるいは中盤で高橋が独歩態勢に持ち込もうとするはずだ。それに、誰がつくことができるか。リオ五輪代表以外でも、2013 年モスクワ世界陸上 20kmW 6 位入賞の西塔拓己（愛知製鋼）や、昨年の中大会 2 位で今季も好調の小林快（ビックカメラ）が、高橋に食い下がるかもしれない。

いずれにしても、代表経験選手が次々に目の前を歩いて行く贅沢なシーンが、実業団の競歩では堪能できる。